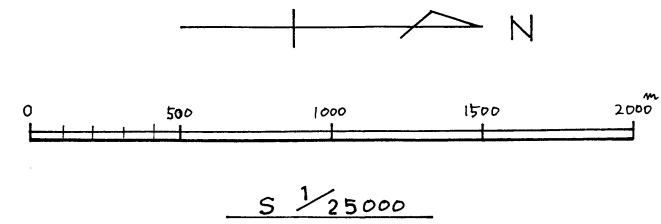


槍ヶ岳・湯俣～北鎌沢～北鎌尾根～槍ヶ岳山荘⑩



北鎌沢ノコルからは、昨日晴嵐荘で会った東京杉並区の白土さんと出会って同行する。白土さんは昨春秋、冬期北鎌縦走のための荷上げの帰途、渡渉点で転落死した娘さんの遺影登山中、1時間ごとに晴嵐荘の宮沢さんと交信する約束である。白土さんは幾度も北鎌をやったベテラン。私は安心して彼のあとに続いて登る。

空が少し明るくなって来たがくもり空。電灯もザックにしまい大吊橋を渡る。右岸は草やかん木茂るデルタ地帯である。細い道をしばらく行くと道標があり、ここが千天の出合であることを確認し、左の天上沢右岸の道を行く。

曲りくねった歩きにいい道だが、天上沢の美しい流れを見下ろしながらの晴れやかな気持ちで行くが、空はどんよりとして暗い。壊れた吊橋を過ぎた左から入る小さな沢の傍で朝食にする。

伊藤新道は昭和50年代の台風により、登山道は崩壊し、通行不能であるので、竹村新道を利用すること。水晶小屋まで8時間。

左側に道標式の四角型遭難碑があり、水俣川にかかる吊橋を渡って左折して、よい道を行く。

至真砂峠  
至三俣山荘  
至七倉バス停  
道は大変よく歩きやすい  
5時間→4時間20分  
木々は小雨の中も3時間30分で歩いた。

夜中冴えていた月も西の山に没し、外は真の闇夜。懐中電灯を照らしながら、水音響く40メートルの吊橋を渡り右折する。道標の形式もとった遭難碑を確認し、水俣川にかかる橋を渡り左折して左岸の道を行く。道はよく、ハッキリしており気もあまる。

北鎌沢出合であることはすぐ分ったが、念のため地図と照合して確認する。沢の左側にはケルンが積んであって、レリーフがあった。沢を仰ぐと、左俣も右俣も判然として尾根に突き上げている。沢の中は20mもあって明るいが、左俣を分けると中々狭い。

朝食をすましても空模様は悪く、ポッポッ落ちてきたのにはガッカリ。ここで戻るのも残念である。北鎌沢出合を確認してこようと思いつく。丁度向側でテント泊している人が見え、どこから渡渉したかを尋ねる。すぐ前の水面スレスレの岩があり、それを飛んできたと聞く。

道は水面よりかなり高いところを歩くが、岩場、枝道もあり、ときには高巻き、下って沢に近づく。この谷周辺には、熊も生息すると聞いたが、夜明けも間近なので遭遇することはなさそう。

昨日午前中まで降った長雨のあとで、ヤミの中を流れる水音は激しく、ひとり歩きには淋しさを感ぜさせない。長い間の願望が、今日こそ実現できる思いが、心にしと胸に迫り、1週間前に上高地～西穂～天狗ノコル～ジャズル4～奥穂縦走で慣れた足は、急ぎ足となる。

天上沢を素早く飛んで渡り、踏跡を探す。天上沢に沿う道と、すぐ尾根のP1に取り付く道があり、私は予定通りの天上沢を渡る。樹林の下に踏跡はハッキリしており、迷うことなく行く。渡渉点で丁度出会った単独の青年も、私のあとに続いて来たが、北鎌沢出合で、いくら待っても来ないので、私はパンを食べた。雨も止み、雲が切れ始めたので、コルまで登ることにした。

歩いても歩いても、槍は目前にそびえるが、荒々しい道は果しなく続く。

雲は切れ青空がぞき、北アルプスの山々が顔を覗かす。山の名を指呼しながら進む。踏跡は変色しているのどよく分るが、すべてが斜面のトラバースであり、登り下りの激しさに驚く。

北鎌尾根縦走もおとわが、一生一度の大仕事。見渡す山々も眺めながらの感動と戦慄の中で、遅い底力が湧くが、歩きであること、やはりテント三張り張れるほどの平地がある尾根に出た。

左俣出合

右俣

北鎌沢出合

千天出合

渡渉点

飛んで対岸へ

水俣乗越

北鎌沢出合であることはすぐ分ったが、念のため地図と照合して確認する。沢の左側にはケルンが積んであって、レリーフがあった。沢を仰ぐと、左俣も右俣も判然として尾根に突き上げている。沢の中は20mもあって明るいが、左俣を分けると中々狭い。

北鎌沢出合

千天出合

渡渉点

飛んで対岸へ

飛んで対岸へ

水俣乗越

北鎌沢出合であることはすぐ分ったが、念のため地図と照合して確認する。沢の左側にはケルンが積んであって、レリーフがあった。沢を仰ぐと、左俣も右俣も判然として尾根に突き上げている。沢の中は20mもあって明るいが、左俣を分けると中々狭い。

北鎌沢出合

千天出合

渡渉点

飛んで対岸へ

飛んで対岸へ